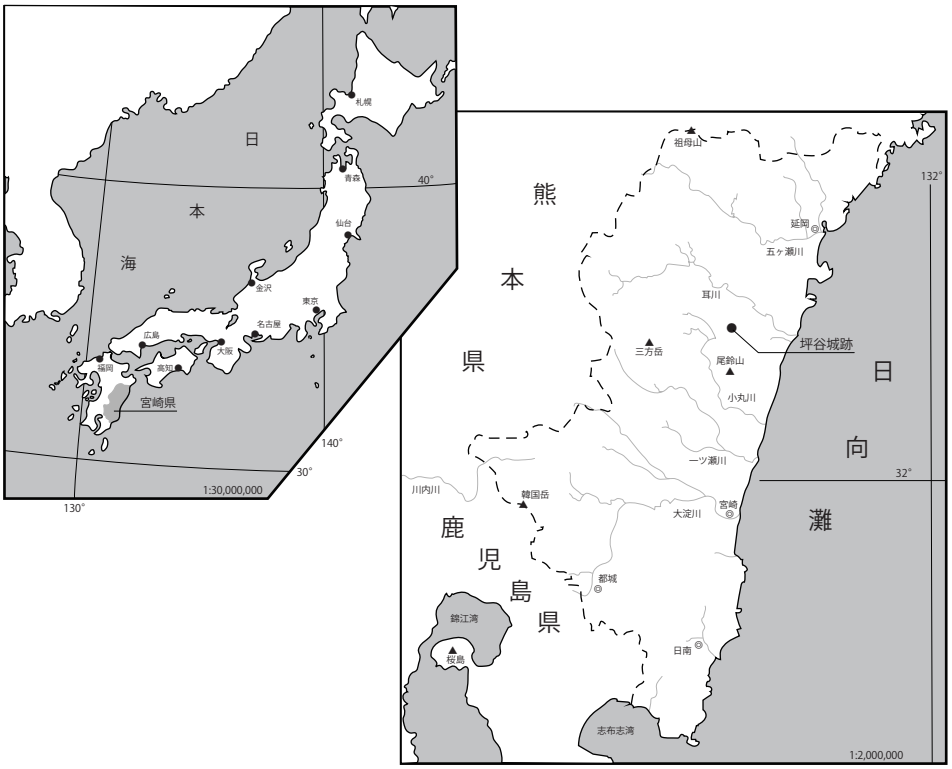
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 251 集

日向市所在

つぼやじょうあと

坪谷城跡

本村谷川 4 通常砂防工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



２０２０

宮崎県埋蔵文化財センター

調査区遠景（南より　画面手前は坪谷川）

巻頭図版2

坪谷城跡出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、平成30年度に本村谷川4通常砂防工事に伴う坪谷城跡の埋蔵文化財発掘調査を行いました。

本書はその報告書です。

坪谷城跡は、戦国期に日向一帯を支配した伊東氏の四十八塁に数えられる出城の一つで、現在でも曲輪や堀切などの城郭の構造物が良好に残っています。

今回の調査では、16世紀代に中国大陸で作られた青磁、白磁、青花などの輸入陶磁器類や刀装具などが出土し、当時の生活を考えるうえで貴重な資料が得られました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査・報告にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長　山 元　高 光

例　言

1　本書は本村谷川４通常砂防工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した宮崎県日向市東郷町坪谷字本村２９５番地、２９９番地に所在する坪谷城跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡名については、遺跡詳細分布報告書上では「坪谷城」となっているが、城跡であること、これまでの宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書において、同様の遺跡の報告を「城跡」として報告していることから、日向市教育委員会に確認の上、本報告書では「坪谷城跡」と呼称することとした。

3　発掘調査は日向土木事務所の依頼を受け宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は平成３０年１０月９日から平成３１年２月８日まで（現地調査日数６１日間）行った。

5　現地での調査記録は高村哲、平井祥蔵、和田理啓が発掘調査作業員の協力を得て作成した。

6　整理作業は図面作成・遺物実測及びトレースは和田が整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

7　本書に掲載した空中写真は、有限会社スカイサーベイに委託を行い撮影したものである。

8　本書で使用した第１図「坪谷城跡と周辺遺跡の位置図（1：25,000）」は国土地理院発行の２万５千分の１図『坪谷』および東郷町教育委員会発行の『東郷町遺跡詳細分布調査報告書』をもとに作成した。

9　本書で使用した土層断面および遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を参考にした。

10　本書で使用した方位は、全て座標北で、標高は海抜絶対高である。また、本書で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。

11　本書の執筆は、第Ⅰ章第１節を甲斐貴充、その他を和田が行い、編集は和田が行った。

12　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第１節　立地と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第２節　中世の周辺環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅲ章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第２節　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　１　基本層序・・・6
　　２　各トレンチの状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　３　出土遺物・・・8

第Ⅳ章　まとめ・・・12

挿図目次

第　１　図　坪谷城跡と周辺遺跡の位置図（S=1：25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第　２　図　坪谷城跡周辺地形図 (1:5000) およびトレンチ配置図（S=1:600）・・・・・・・・・・・・・・・・5
第　３　図　坪谷城跡　トレンチ２平面図およびトレンチ２、８、14 土層断面 (S=1:100)・・・・・・・・7
第　４　図　坪谷城跡出土青花①（S=1:3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第　５　図　坪谷城跡出土青花②碁笥底碗および瓶（S=1:3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第　６　図　坪谷城跡出土白磁・青磁・国産陶磁・土師器（S=1:3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第　７　図　坪谷城跡出土金属器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

図版目次

巻頭図版1　調査区遠景（南より　画面手前は坪谷川）
巻頭図版2　坪谷城跡出土遺物

図版１（坪谷城跡遠景(南西方向から）・トレンチ２(堀切状遺構）土層断面・トレンチ３土層断面・トレンチ４土層断面・トレンチ５土層断面・トレンチ６(近～現代の石組み)・トレンチ７土層断面・トレンチ８土層断面）・・15

図版2（トレンチ９土層断面・トレンチ 10土層断面・トレンチ 11土層断面・トレンチ 14土層断面・作業風景1・作業風景 2・笄）・・・

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

日向市東郷町坪谷の本村谷川４地区には、避難所としての坪谷小学校 （体育館）と避難道路としての国道446号を含む人家5戸を保全対象とする危険渓流が存在する。この渓流の流域内では、渓岸及び渓床の浸食が確認され、浸食部分には不安定土砂が堆積しており、近年多発する集中豪雨等によって下流域に流失し、被災を及ぼす可能性がある。

そこで宮崎県では、下流域の保全を図るため、渓流内に砂防堰堤を整備する事業（本村谷川４地区通常砂防事業）を計画した。この事業計画を受けて、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、平成25（2013）年度に県の関係機関である砂防課及び日向土木事務所から、県文化財課に対して埋蔵文化財保護に関する協議の申し入れがあった。事業対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地で中世の城跡「坪谷城跡」の範囲内に位置し、事業が埋蔵文化財に対して影響を及ぼす可能性が想定された。そこで宮崎県文化財課は、平成25(2013)年６月以降、砂防課及び日向土木事務所と度重なる協議を行い、平成28(2016)年２月に事業予定地内の埋蔵文化財の内容や経費積算のデータを得るため、確認調査を行った。

確認調査の結果、事業予定区域のうち、堰堤建設部及びその周辺の約1,000㎡について中世の山城に関連すると推測される遺構・遺物が確認されたことから県文化財課は、埋蔵文化財が確実に残存していることを日向土木事務所に対して回答した。以後、確認調査結果に基づき、開発計画と埋蔵文化財保護の方法について協議を重ね、堰堤建設を回避することは建設位置の変更等も含め下流域の安全上のため不可避であることから、宮崎県教育委員会は現状保存が困難であると判断し、日向土木事務所に対し発掘調査録保存の措置を指示した。事業実施に先立って、日向土木事務所から文化財保護法第94条に則って県教育委員会に工事通知が提出され、県教育委員会から日向土木事務所に対して発掘調査の指示に関わる回答を行った。発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、平成30年10月９日から調査に着手した。

第２節　調査の組織

坪谷城跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

平成 30 年度　発掘調査及び整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所長		長峯　勝志
副所長兼総務課長		田中　礼子
総務担当リーダー		寺原　真由美
総務担当	主査	山﨑　智子
調査課長		吉本　正典
調査第一担当リーダー		松林　豊樹
調査第一担当	主査	和田　理啓

令和元年度　整理作業及び報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所長		山元　高光
副所長兼総務課長		内野　真由美
総務担当リーダー		寺原　真由美
総務担当	主査	赤木　恭子
調査課長		赤崎　広志
調査第一担当リーダー		和田　理啓

事業調整

宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財担当　今塩屋毅行（平成 25年度～ 28年度）

甲斐　貴充（平成 29年度～令和元年度）

調査指導

五ヶ瀬町立三ヶ所小学校　　校長　　福田　泰典

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第 1 節　立地と歴史的環境

坪谷城跡が立地する日向市は、平成 18（2006）年に東郷町を編入し、北は五十鈴（いすず）川南岸、南は征矢原（そやばる）川流域、西は小丸川の上流域を形成する渡（ど）川、東は日向灘に面する宮崎県の北東部の約 336k㎡の地域をしめる。坪谷城は現在の市域の中央西寄りに築造されており、遺跡南側を東に流れる耳川の支流坪谷川は四万十累層群と尾鈴山酸性岩類の分布域の境界線にあたる。

坪谷城跡は、珍神山（標高 828 m）から加子山（標高 866.8 m）に連なる山並みから南に延びる尾根上に立地する。南には耳川の支流坪谷川が東進し、坪谷城跡が立地する尾根との間に小さな平地が形成されており、現在の坪谷の集落が営まれている。

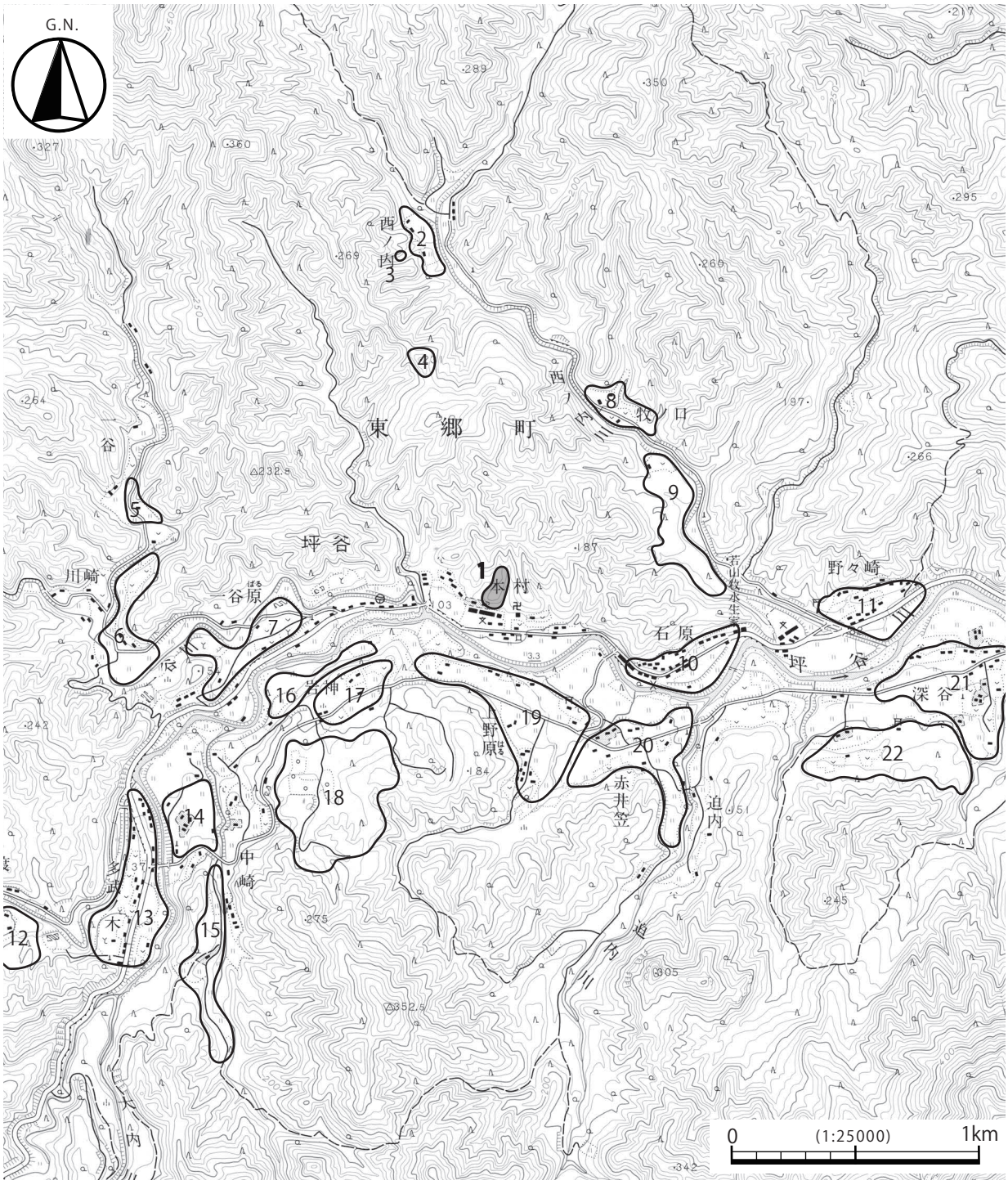
坪谷川流域で発掘調査が行われた遺跡は少ないが、調査された遺跡はいずれも一定以上の遺物や遺構が確認されている。旧石器時代にまで遡るものは坪谷川沿いの遺跡では確認されていないが、赤松遺跡では縄文時代晩期の、樋田遺跡では弥生後半の、鶴野内中水流遺跡では古墳時代のまとまった集落が調査されており、流域は先史時代からの人々の暮らしが連綿と続いていることがわかる。

近世においては、17 世紀の末に山陰・坪谷村一揆が起こり、両村が延岡藩から天領となる契機となっている（東郷町誌編さん委員会 1979）。

第 2 節　中世の周辺環境

坪谷城は伊東氏の最盛期であった義祐（1512-1585）、義益（1546-1569）の代には伊東四十八塁のひとつに数えられているが、文献には城名とその城主が記されているのみである。文献にある城主、米良休助重時は元亀 3（1572）年の木崎原の合戦で戦死している。その後、坪谷城周辺は島津氏の勢力範囲となっており、大友氏の南下により一時島津氏の勢力下を離れたようであるが、大友氏が耳川の合戦で敗れたのちは、再び島津氏の支配下となる。その後の島津討伐により高橋元種の所領の一部となり、江戸時代に入り延岡藩領となっているようである。

上記のように、坪谷城周辺に限ってれば中世の記録は非常に希薄であり、詳細は不明な部分が多い。



1. 坪谷城跡　2. 西ノ内遺跡　3. 追立遺跡　4. 坪谷出城　5. 下一谷遺跡　6. 芋の原遺跡　7. 下一谷原第２遺跡　8. 轟遺跡　9. 深口遺跡　10. 石原遺跡　11. 野々崎遺跡　12. 瀬渡遺跡　13. 多武の木遺跡　14. 中崎遺跡　15. 大内平遺跡　16. 下一谷原第１遺跡　17. 岩神遺跡 18. 大堀遺跡　19. 上野原遺跡　20. 赤井笠遺跡　21. 深谷第１遺跡　22. 深谷第２遺跡

第１図　坪谷城跡と周辺遺跡の位置図（S=1：25,000）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は砂防ダム建設に伴うものであり、砂防ダム本体により掘削される部分と砂防ダムにより堰き止められる土砂の堆積する想定範囲が調査対象となった。調査対象範囲は山城本体部分にかかる箇所が少なく地形から曲輪や堀切などの構造物の可能性がある部分についてトレンチを設定、遺構が確認された場合トレンチを拡張する方法をとった。トレンチは 14 箇所設定した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 30 年 10 月９日
- 作業員雇用開始
- 周辺環境整備
- トレンチ 1 設定、掘削開始

10 月 10 日～
- トレンチ 1 掘削

10 月 12 日～
- トレンチ 14 設定、掘削（青花片出土）

10 月 15 日
- トレンチ 1 調査終了

10 月 23 日～ 11 月２日
- 伐採作業のため発掘作業中断

11 月 5 日～
- トレンチ 14 掘削、拡張（青磁・白磁出土）

11 月 12 日～
- トレンチ２～４設定、掘削開始

11 月 14 日～
- トレンチ 5 設定、掘削開始

11 月 15 日～
- トレンチ６設定、掘削開始

11 月 16 日
- トレンチ 14 調査終了

11 月 19 日
- トレンチ 14 調査終了
- トレンチ 2 拡張
- トレンチ 6 拡張

11 月 27 日
- トレンチ４、５調査終了

12 月７日
- トレンチ６調査終了

12 月 13 日～
- トレンチ７設定、掘削開始

12 月 17 日～
- トレンチ７拡張

12 月 19 日～
- トレンチ２調査終了

12 月 25 日～
- トレンチ８設定、掘削開始（青花片２点出土）

12 月 27 日～
- トレンチ９、10 設定、掘削開始

12 月 28 日～平成 31 年１月６日
- 年末閉庁により作業中断

１月９日～
- トレンチ９調査終了
- トレンチ 11、12 設定、掘削開始

１月 10 日～
- トレンチ 12 設定、掘削開始

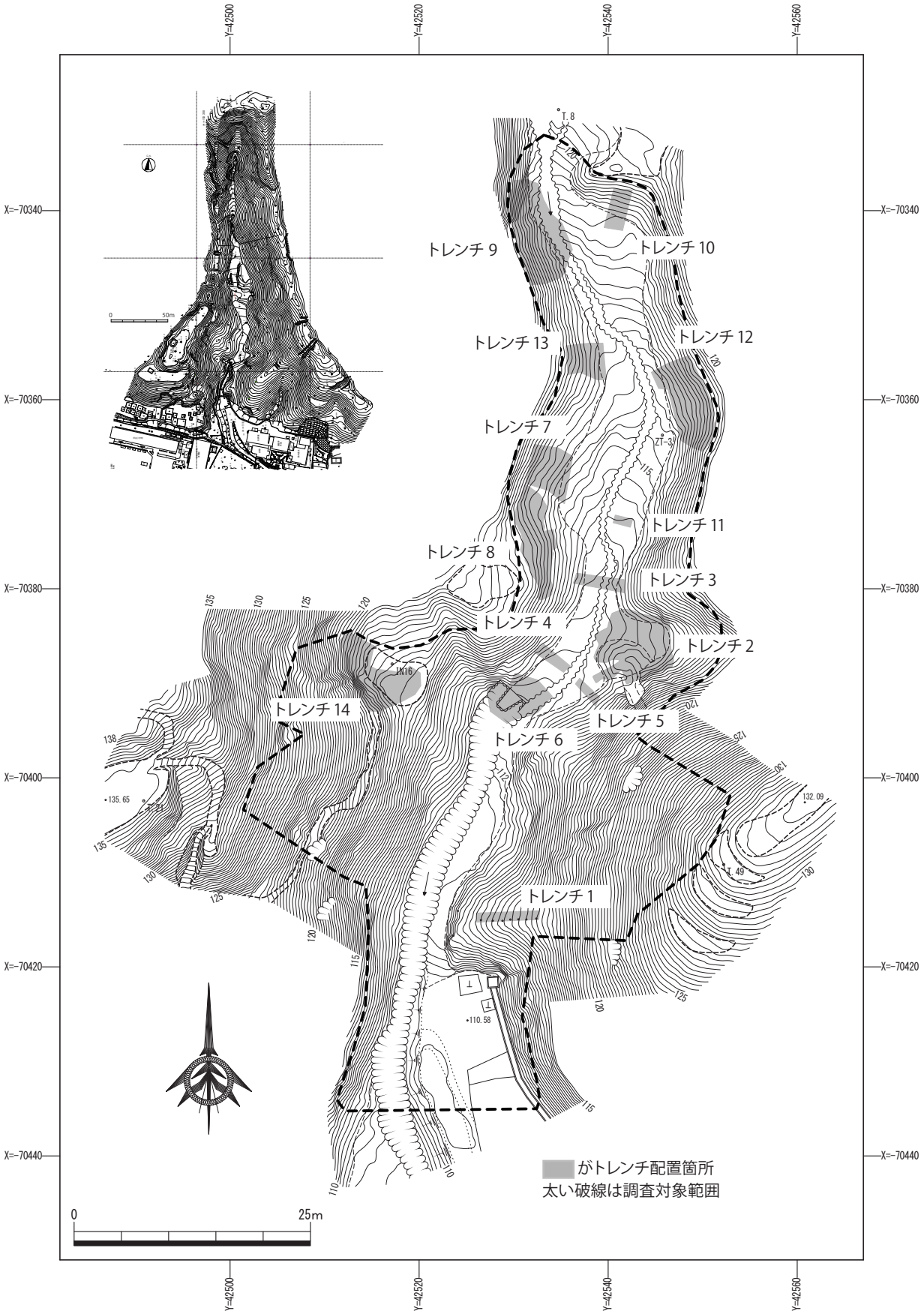
１月 22 日
- 福田泰典氏調査指導

1 月 24 日
- トレンチ 13 設定、掘削開始

２月６日
- トレンチ８～ 10 調査終了

2 月７日
- トレンチ 11、13 調査終了

2 月８日
- 撤収



第 2 図　坪谷城跡周辺地形図 (1:5000) およびトレンチ配置図（S=1:600）

第２節　調査の概要

１　基本層序

調査対象地の大部分は二本の尾根に挟まれた谷部であり、頁岩の地盤の上に尾根の崩落土が厚く堆積していた。その他は斜面部分が多く、岩盤の上には 10㎝前後の腐葉土が堆積しているに過ぎなかった。

２　各トレンチの状況

調査区内に 14 箇所のトレンチを設けた。各トレンチの状況は以下に示すとおりである。

トレンチ１（第２図）

調査区の南端、土塁状に突出した尾根に設けたトレンチである。土層観察の結果、人工的な構造は確認できなかった。トレンチ１の西側尾根先端部の土層の確認も行ったが、同様に人為的な盛土や掘削などは確認できなかったため、自然地形であると判断した。

トレンチ２（第２図・第３図）

調査区西側の尾根を東西に区切る堀切に連なる谷部に設けたトレンチである。地山を形成する頁岩の岩脈が断ち切られており、堀切状に谷を整形し人為的に傾斜を強くしたもの（堀切状遺構）であると判断した。坪谷城に関連する構造物であろう。遺物は出土していない。

トレンチ３・４・５・11（第２図）

調査区の谷部に設けたトレンチである。土層観察の結果、大部分が尾根部からの崩落土で埋没していることがわかった。遺物の出土は見られず、人為的な整形の痕跡も確認されなった。

トレンチ６（第２図・図版１）

調査区の西側斜面麓のコンクリートで固められた石組み暗渠の周囲に設けたトレンチである。トレンチ内からは暗渠に続く通路状の石組みと、暗渠東側にコンクリートが張られた平場が確認できた。遺物の出土はなかったが、コンクリートの存在などから近現代に機能していた水汲み場だと判断した。

トレンチ７・９・12・13（第２図）

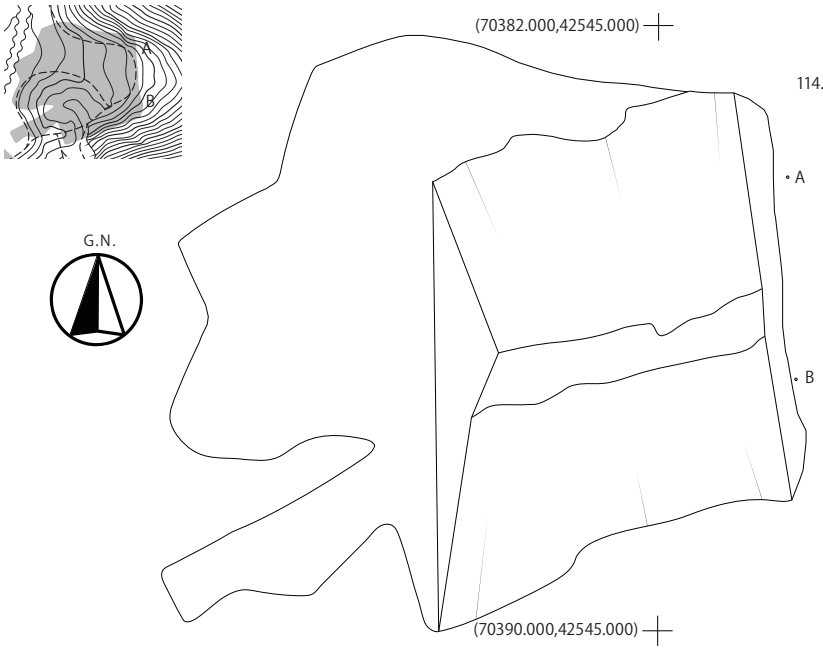
調査区の東西斜面に設けたトレンチである。各トレンチ共に、地山面から 10㎝前後の腐葉土層があるのみであった。明確な人為的整形は確認できなかったが、傾斜を強くするために何らかの手が加えられている可能性はある。トレンチ 12 から青花片（第５図 26）が１点出土している。

トレンチ８（第２図・第３図）

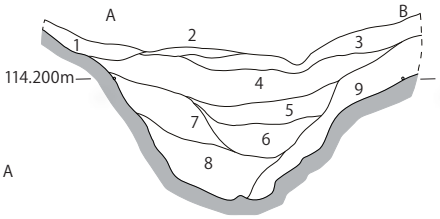
調査区の西側に位置する平場状の地形が認められた部分に設けたトレンチである。トレンチからは青花片が若干出土した。土層観察の結果、平坦な整地層が確認できており、何らかの人為的な整形が行われていたと考えられるが、その性格については調査範囲が限られていたこともあり判然としない。

トレンチ 10（第２図）

調査区の北端に隣接した基壇状の平場へ続く斜面に設けたトレンチである。土層観察の結果からは、人為的な整形の痕跡は認められなかった。基壇状の平場は、東側奥にコンクリート壁で囲まれた施設があり、近現代に存在した家屋や倉庫などを設置するために整地されたもので、城郭には関連しないと判断した。

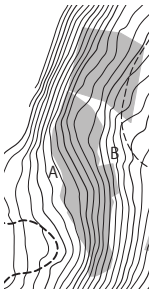


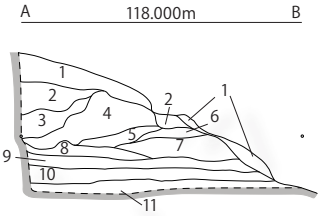
トレンチ２平面図 (S=1:100)



1.黄褐 (10YR5/6)粘土混礫　地山が崩落した土が主体。
2.にぶい黄褐 (10YR5/4)シルト混礫 1層と同様の組成。
3.黒褐 (10YR3/2)シルト混礫　1，2層同様に地山崩落土が主体。1，2層より腐植土を多く含む。
4.褐 (10YR4/4)シルト混礫　径 2～ 5㎝の地山崩落土が主体。
5.にぶい黄褐 (10YR5/4)シルト混礫 径 10㎝以上の地山崩壊礫を 3%ほど含む。
6.にぶい黄褐 (10YR5/3)シルト混礫 径 2㎝前後の地山崩落土が主体。
7.黄褐 (10YR5/6)粘土混礫　径 2～ 10㎝の地山崩壊礫が主体。
8.褐 (10YR4/4)シルト混礫
9.黒褐 (10YR3/2)シルト混礫黒褐 (10YR3/2)シルト混礫

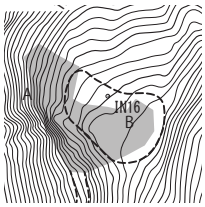
トレンチ２土層断面図 (S=1:100)

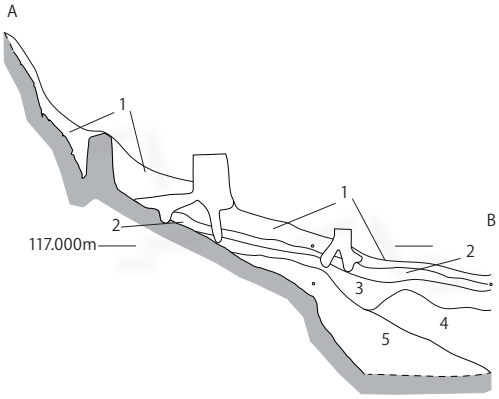




トレンチ８土層断面図 (S=1:100)

1.オリーブ褐 (2.5Y4/3)粘土混礫
2.オリーブ褐 (2.5Y4/4)粘土混礫
3.明黄褐 (10YR6/6)粘土混礫
4.明黄褐 (10YR6/8)粘土混礫
5.にぶい黄褐 (10YR6/4)粘土混礫
6.橙 (7.5YR6/8)粘土混礫
7.黄橙 (7.5YR7/8)粘土混礫
9.褐 (10YR4/6)粘土混粗砂
10.黄褐 (10YR5/6)粘土混礫
11.黄褐 (10YR5/8)粘土混粗砂





トレンチ 14 土層断面図 (S=1:100)

1.黒褐 (7.5Y2/2)粘土混礫
2.にぶい橙 (7.5Y6/4)粘土混礫
3.褐 (7.5YR4/4)粘土混礫
4.にぶい褐 (7.5YR5/3)粘土混礫
5.にぶい黄褐 (10YR4/3)礫

0　(1:100)　5m

第３図　坪谷城跡　トレンチ２平面図およびトレンチ 2、８、14 土層断面 (S=1:100)

トレンチ 14（第２図・第３図）

調査区の西側斜面に傾斜が緩やかになった平坦部があり、確認調査時にも輸入陶磁器片が出土していたので、この部分が曲輪などの城郭施設であるかを検討するために設けたトレンチである。

土層観察の結果、平坦部は、西側斜面が地すべり状に崩落したのち、土砂が堆積して形成されたものと確認され、曲輪などの城郭に関連する施設ではないことがわかった。

遺物の大部分はこのトレンチからの出土であり、坪谷城の主郭が直上にあることから、地すべりに伴って転落したものと判断した。

３　出土遺物 (第４図 ~ 第７図)

出土遺物は、トレンチ 14 から最も多く出土しており、その他、トレンチ 8、12 等から出土している。輸入磁器類が大半を占め、凡そ 16 世紀後半代に位置づけられるものである。

１～４はトレンチ８から出土した青花の高台付皿である１～２は端反りの口縁をもつもので、２は熱を受け釉調が変色している。３は口縁部が残っていないが、全体の形状から同様に端反の口縁をもつものでると考えられる。２と同様に被熱による変色が認められる。４は口縁部の形状から輪花皿になると考えられる。

５～ 22 はトレンチ 14 から出土した青花の高台付皿である。５は外面に重ね焼きを行った形跡が残る。６～ 17 は端反りの口縁をもつもので、６～ 11 は口縁から底部までが残存しており、10、11 は熱を受け変色している。12 ～ 17 は口縁部のみの破片である。12 および 15 ～ 17 は熱を受け変色している。18 は見込み部の破片で、19 ～ 22 は高台部分から体部にかけての破片である。22 は被熱による変色がみられる。

23 ～ 37 は青花の碗である。23 ～ 25 はトレンチ８から出土したもの、26 はトレンチ 12 から、27 ～ 37 はトレンチ 14 から出土したものである。28、35 に被熱による変色がみられる。

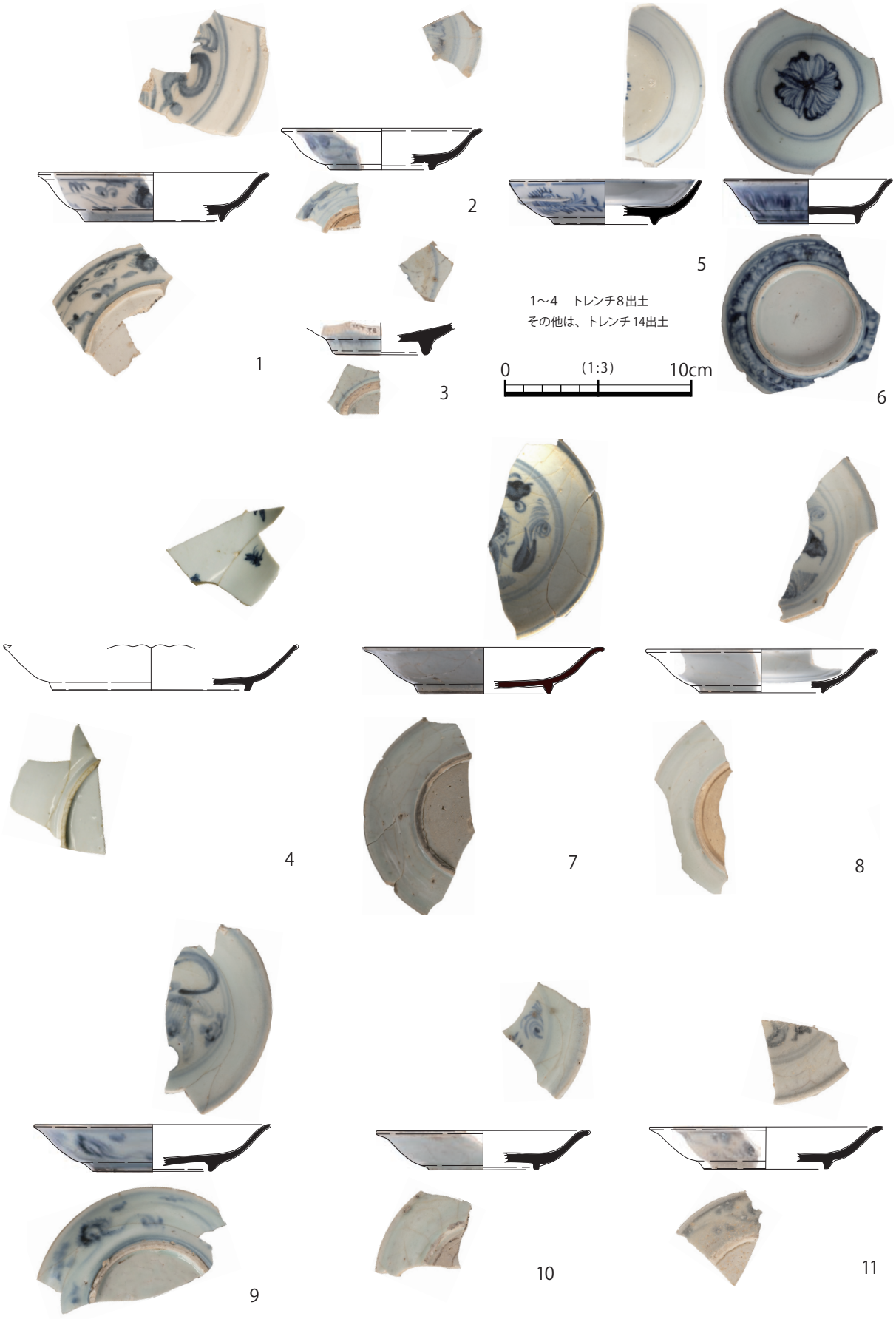
38 ～ 41 は碁笥底を呈する青花碗である。全てトレンチ 14 から出土しており、40 は被熱による変色が認められる。39 は見込み部に「寿」の異体字が絵付けされている。42 はトレンチ 14 から出土した青花の瓶の頸部で欠損した把手が確認できる。

43 ～ 63 は白磁である。43 はトレンチ７から、44 はトレンチ８、46 はトレンチ 13 からそれぞれ出土した皿である。45 はトレンチ 10 から出土した碗である。47 ～ 63 は全てトレンチ 14 から出土した。47 ～ 62 は高台付きの皿で、47 は口縁部が直線的に伸びるもの、48 ～ 58 は端反りの口縁部をなす。59 ～ 62 は底部付近の破片である。63 は碗の底部で、体部にトビガンナの痕跡が確認できる。

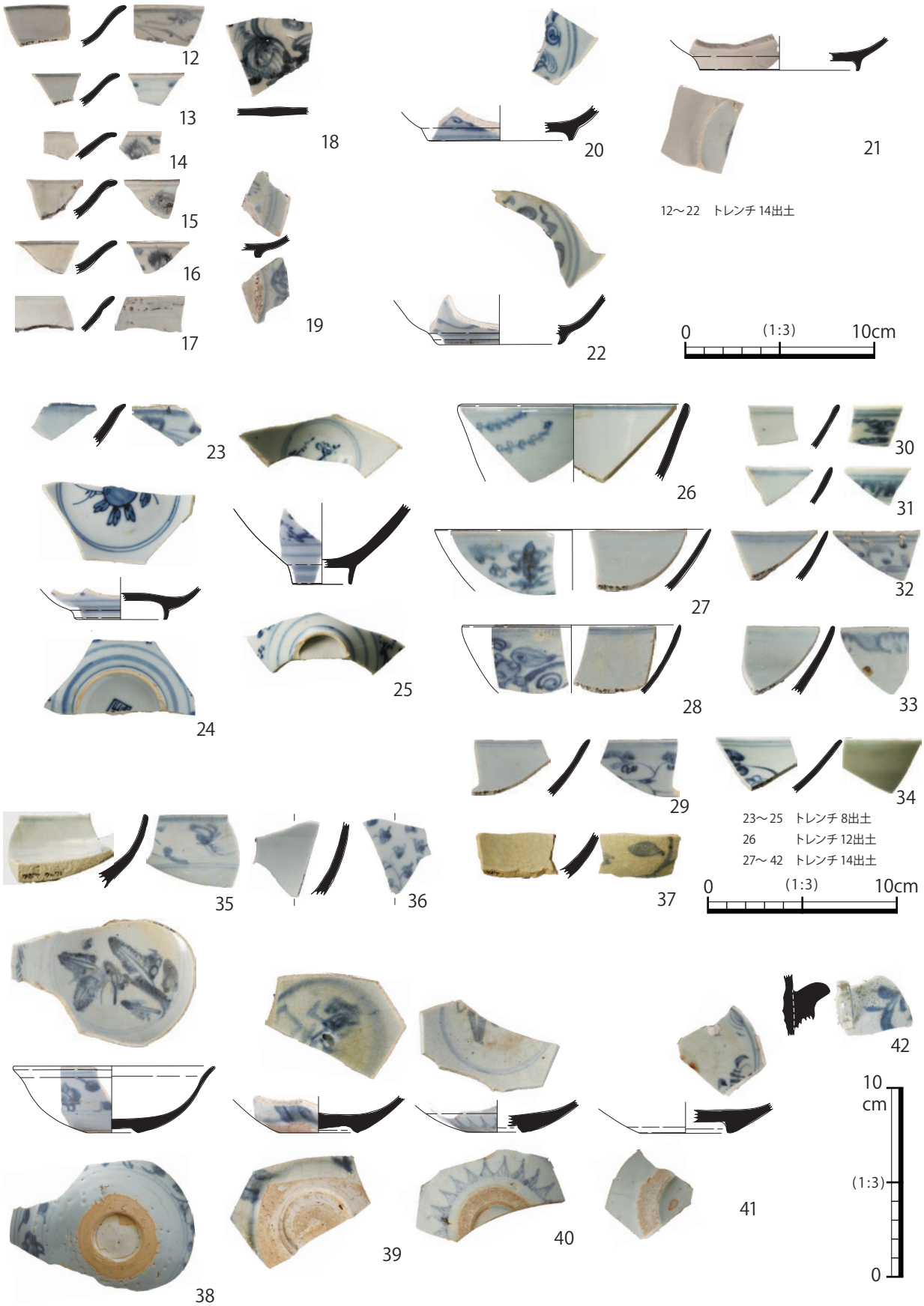
64 ～ 67 は青磁碗、68、69 は青磁の菊花皿である。64 はトレンチ８から、そのほかはトレンチ 14 から出土した。64、65 には鎬蓮弁文が確認できる。66 は熱により釉調が変色している。

70 ～ 73 は国産陶器で全てトレンチ 14 から出土している。70 ～ 72 は甕で 73 は擂鉢である。

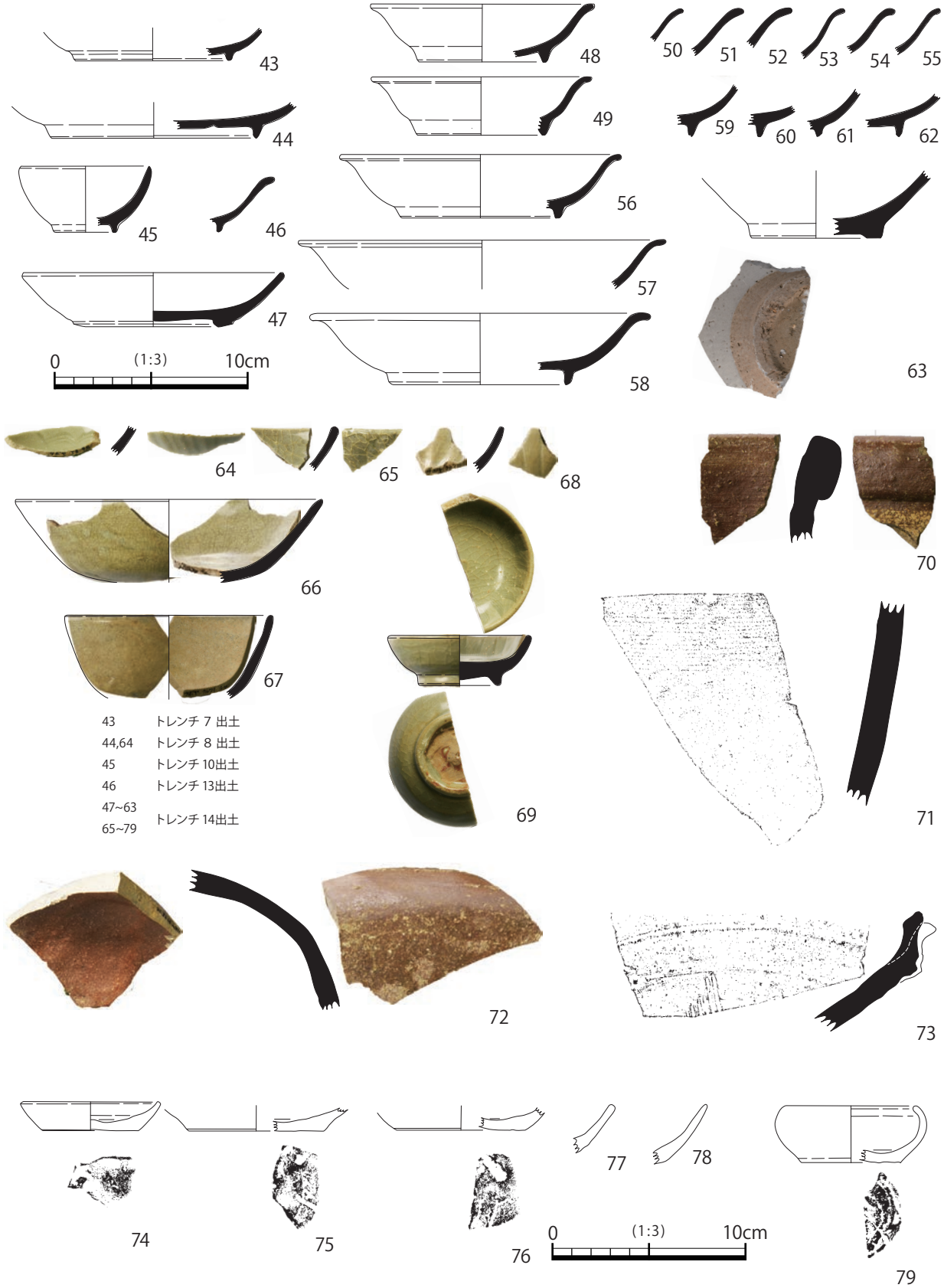
74 ～ 79 は土師器で、全てトレンチ 14 からの出土である。74 は皿、75 ～ 78 は皿もしくは坏で、79 は大きく内湾する体部を持つ坏である。



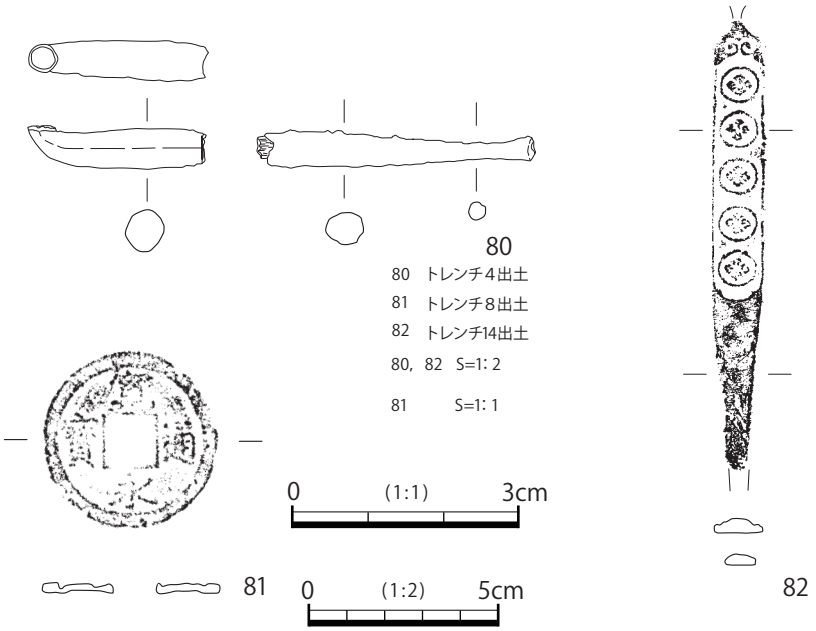
第４図　坪谷城跡出土青花①（S=1:3）



第５図　坪谷城跡出土青花②碁笥底碗および瓶（S=1:3）



第６図　坪谷城跡出土白磁・青磁・国産陶磁・土師器（S=1:3）



80 ～ 82 は銅製の部位をもつ遺物で、詳細な時期は不明である。80 はトレンチ 4 から出土した煙管、81 はトレンチ 8 から出土した寛永通宝、82 はトレンチ 14 から出土した笄である。笄は、棹の先端と耳かき部分を欠損しており、身の額の内に木瓜文が施されている。

第 7 図　坪谷城跡出土金属器

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では、城郭の主要部分が調査の対象になっていないこともあり、非常に限られた情報しか得ることができなかったが、出土遺物のほとんどが主要城郭部分からの転落と考えられることや 16 世紀後半に限定できることなどから坪谷城が機能していた時期をほぼ特定できたと考えられる。また、出土遺物に被熱したものが散見できることは、その廃絶の契機にも示唆を与えることになるだろう。

伊東四十八塁に数えられながら、城郭自身の文字記録が非常に少ないこともあり、詳細を知ることは難しいが、先行するとされる東側尾根の構造も併せて、今後の検討に期待したい。

引用・参考文献

宮崎県 1999『宮崎県史叢書』日向記

宮崎県東郷町教育委員会 1999『東郷町遺跡詳細分布調査報告書』東郷町文化財調査報告書

宮崎県埋蔵文化財センター 1999『鶴野内中水流遺跡』宮崎県埋蔵文化財調査報告書第 16 集

宮崎県農政水産部農業振興課 1987『日向』土地分類基本調査　東臼杵・日向地域

東郷町誌編さん委員会 1979『東郷町誌』

宮崎県東郷町教育委員会 2003『八ッ山遺跡』東郷町文化財調査報告書第 7 集

宮崎県東郷町教育委員会 2003『上野原遺跡』東郷町文化財調査報告書第6集

日向市教育委員会 2007『仲野原遺跡』日向市文化財調査報告書

宮崎県東郷町教育委員会 1991『樋惰遺跡』県営圃場整備序行（坪谷川地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮崎県東郷町教育委員会 1987『赤松遺跡・下水流遺跡』東郷町文化財調査報告書第 1 集

若山浩章 2008「山田匡徳と石地城」『図説　東臼杵・西臼杵の歴史』

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量			調整技法・文様等		色調		焼成	胎土	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ8	(12.2)	(7.4)	2.7	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	精良	口縁部で 1/7強残存
2	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ8	(10.7)	(5.6)	2.3	施釉	施釉	灰白 (5GY8/1)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	精良	口縁部で 1/10程度残存
3	青花	高台付皿	底部	トレンチ8	―	(4.9)	―	施釉	施釉	暗オリーブ灰 (2.5GY7/1)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	精良	外面に被熱による変色 底部で 1/7残存
4	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ8	(15.6)	(10.6)	2.4	施釉	施釉	灰白 (10YR8/1~N8/)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	底部で 1/7残存
5	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(10.1)	(5.2)	2.4	施釉	施釉	灰白 (N8/)	灰白 (5Y8/1)	堅緻	精良	
6	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	-(9.0)	(5.5)-	2.4-	施釉	施釉	明青灰 (5B7/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
7	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(12.8)	(7.0)	2.5	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	浅黄 (2.5Y7/3)	堅緻	精良	
8	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(12.3)	(6.6)	2.4	施釉	施釉		浅黄 (2.5Y8/4)	堅緻	精良	
9	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(12.7)	(6.3)	2.6	施釉	施釉	明褐灰 (7.5GY8/1)	灰白 (5Y8/1)	堅緻	精良	口縁で 1/3残存
10	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(11.4)	(5.8)	2.1	施釉	施釉	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	堅緻	精良	表面が被熱 口縁部で 1/6残存
11	青花	高台付皿	口縁～底部	トレンチ14	(11.9)	(6.4)	2.2	施釉	施釉	灰白 (10Y7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により発泡 口縁部で 1/8ほど残存
12	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	灰白 (10Y7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
13	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明青灰 (5BG7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
14	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	精良	
15	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	暗オリーブ灰 (5GY7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
16	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	淡黄 (2.5Y8/4)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
17	青花	高台付皿	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (10YR8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
18	青花	高台付皿	見込	トレンチ14	―	―	―		施釉	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	見込み部分の破片
19	青花	高台付皿	底部	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (5GY7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
20	青花	高台付皿	底部	トレンチ14	―	(7.7)	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	底部で 1/6残存
21	青花	高台付皿	底部	トレンチ14	―	(8.2)	―	施釉	施釉	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	底部で 1/8残存
22	青花	碗	底部	トレンチ14	―	(6.5)	―	施釉	施釉	灰白 (5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色 底部で 1/4ほど残存
23	青花	碗	口縁	トレンチ8	―	―	―	施釉	施釉	明青灰 (5BG7/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
24	青花	碗	底部	トレンチ8	―	(4.8)	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
25	青花	碗	底部	トレンチ8	―	(3.1)	―	施釉	施釉	明青灰 (5B7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	底部で1/８残存
26	青花	碗	口縁	トレンチ12	(12.7)	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	口縁部で1/８残存
27	青花	碗	口縁	トレンチ14	(14.5)	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	口縁部で1/８残存
28	青花	碗	口縁	トレンチ14	(11.5)	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (10GY8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
29	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (10GY8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
30	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明青灰 (5BG7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
31	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明青灰 (5BG7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
32	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明青灰 (5BG7/1)	明オリーブ灰 (5GY7/1)	堅緻	精良	
33	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (10GŶ8/1)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	
34	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GŶ7/1)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	
35	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (2.5GY8/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
36	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	明緑灰 (7.5GY8/1)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	
37	青花	碗	口縁	トレンチ14	―	―	―	施釉	施釉	灰白 (5Y7/2)	浅黄橙 (7.5YR6/4)	堅緻	精良	表面が被熱により変色
38	青花	碁笥底碗	口縁～底部	トレンチ14	(10.4)	(2.7)	3.6	施釉	施釉	灰白 (2.5GY8/1)	灰白(2.5GY8/2)	堅緻	精良	底部は完全 口縁部で 1/16程度残存
39	青花	碁笥底碗	底部	トレンチ14	―	(4.1)	―	施釉	施釉	明オリーブ灰 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	底部で 2/3残存
40	青花	碁笥底碗	底部	トレンチ14	―	(2.6)	―	施釉	施釉	灰白 (10Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	表面が被熱により変色 底部で 1/3残存
41	青花	碁笥底碗	底部	トレンチ14	―	(4.8)	―	施釉	施釉	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	

※括弧内の数字は推定値

第１表　坪谷城跡出土遺物観察表①

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量			調整技法・文様等		色調		焼成	胎土	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
42	青花	瓶	頸部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (5GY8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	被熱による発泡
43	白磁	皿	底部	トレンチ7	—	(7.6)	—	施釉	施釉	灰白 (5YR8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	底部で 1/8残存
44	白磁	皿	底部	トレンチ8	—	(10.6)	—	施釉	施釉	灰白 (10YR8/1)	灰白 (5YR8/1)	堅緻	精良	底部で 1/8残存
45	白磁	碗	口縁～底部	トレンチ10	(6.6)	(3.2)	3.5	施釉	施釉	灰白 (10Y8/1)	灰白 (5Y8/)	堅緻	精良	底部で 1/5残存
46	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ13	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
47	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	(13.2)	(6.7)	2.8	施釉	施釉	灰白 (N8/)	灰白 (N8/)	堅緻	精良	底部で 1/4残存
48	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	(11.6)	(6.6)	3.0	施釉	施釉	灰白 (5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	口縁部で 1/4残存
49	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	-(11.4)	(6.7)	3.0	施釉	施釉	灰白 (5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	口縁部で 1/6残存
50	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
51	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
52	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
53	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	堅緻	精良	
54	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
55	白磁	皿	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
56	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	(14.4)	(8.2)	3.3	施釉	施釉	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	底部で 1/6残存
57	白磁	皿	口縁～体部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	口縁部で 1/4残存
58	白磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	(17.6)	(8.8)	3.8	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	見込みに砂目積痕 底部で 1/10残存
59	白磁	皿	底部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	
60	白磁	皿	底部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
61	白磁	皿	底部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	堅緻	精良	
62	白磁	皿	底部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (10YR8/1)	堅緻	精良	
63	白磁	碗	底部	トレンチ14	—	(6.8)	—	施釉	施釉	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	精良	底部にトビガンナ
64	青磁	碗	体部	トレンチ8	—	—	—	施釉	施釉	オリーブ灰 (10Y6/2)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	鎬蓮弁
65	青磁	碗	口縁～体部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	オリーブ灰 (10Y6/2)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	精良	鎬蓮弁
66	青磁	碗	口縁～体部	トレンチ14	(15.7)-	—	—	施釉	施釉	オリーブ黄 (7.5Y6/3)	灰白 (2.5Y8/2)	堅緻	精良	胴部で 1/6 程度残存
67	青磁	碗	口縁～体部	トレンチ14	(10.8)	—	—	施釉	施釉	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y7/2)	堅緻	精良	表面が被熱により変色 口縁部で 1/8残存
68	青磁	碗	口縁～体部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	灰白 (5Y8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	堅緻	精良	
69	青磁	皿	口縁～底部	トレンチ14	(7.6)	(4.4)	2.8	施釉	施釉	オリーブ灰 (10Y6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	堅緻	精良	全体の 1/2 程度残存
70	陶器	甕	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	堅緻	6㎜以下の灰白粒、 3㎜以下の浅黄橙粒を含む	
71	陶器	甕	体部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	黄灰 (2.5Y4/1)	灰黄褐 (10YR5/2)	堅緻	4㎜以下の赤褐粒 3㎜以下の淡黄粒を含む	備前
72	陶器	甕	体部	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	堅緻	3㎜以下の灰白粒、 2㎜以下の黒褐粒を含む	
73	陶器	擂鉢	口縁	トレンチ14	—	—	—	施釉	施釉	褐 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/3)	堅緻	3㎜以下の灰白粒を多く含む	底部ヘラ切り離し
74	土師器	皿	口縁～底部	トレンチ14	(7.2)	(5.0)	1.5	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	7㎜以下の褐色粒 3㎜以下の灰白粒を含む	底部ヘラ切り離し
75	土師器	皿もしくは坏	底部	トレンチ14	—	(6.8)	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2㎜以下の灰白粒をわずかに含む	底部ヘラ切り離し
76	土師器	皿もしくは坏	底部	トレンチ14	—	(6.6)	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰白粒をわずかに含む	
77	土師器	皿もしくは坏	口縁	トレンチ14	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	微細な灰白・赤褐粒をわずかに含む	
78	土師器	皿もしくは坏	口縁	トレンチ14	—	—	—	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	2mm以下の灰白、赤褐色粒を少量含む	
79	土師器	坏	口縁～底部	トレンチ14	(6.8)	(5.2)	2.9	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	2mm以下の灰白、赤褐色粒を少量含む	底部ヘラ切り離し

※括弧内の数字は推定値

遺物番号	種別	素材	出土地点	法量 (cm)			重量 (gw)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
80	煙管	銅	トレンチ 4	—	—	—	—	雁首と吸口
81	寛永通宝	銅	トレンチ 8	径 2.3		0.1	2.4	
82	笄	銅	トレンチ 14	11.9	1.3	0.4	25.2	

第２表　坪谷城跡出土遺物観察表②

坪谷城跡遠景(南西方向から)

トレンチ2(堀切状遺構) 土層断面

トレンチ3土層断面

トレンチ4土層断面

トレンチ5土層断面

トレンチ6(近～現代の石組み)

トレンチ7土層断面

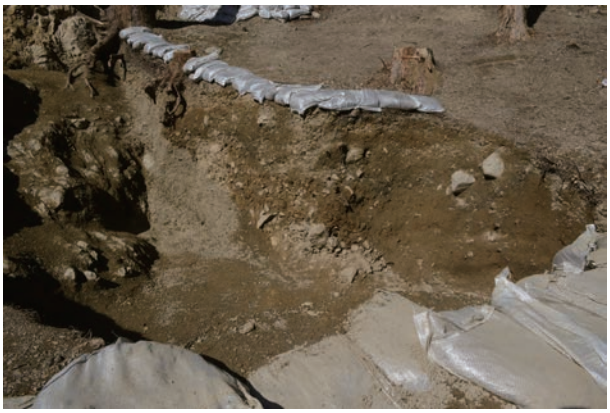
トレンチ8土層断面

図版2

トレンチ9土層断面

トレンチ10土層断面

トレンチ11土層断面



トレンチ14土層断面

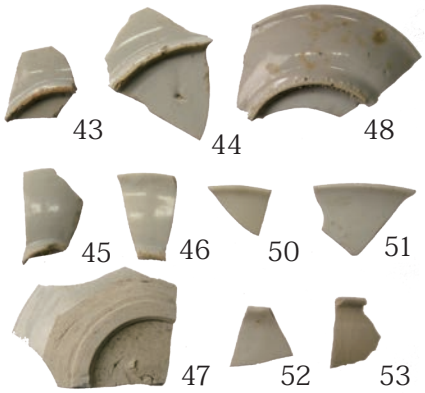
作業風景1

作業風景2

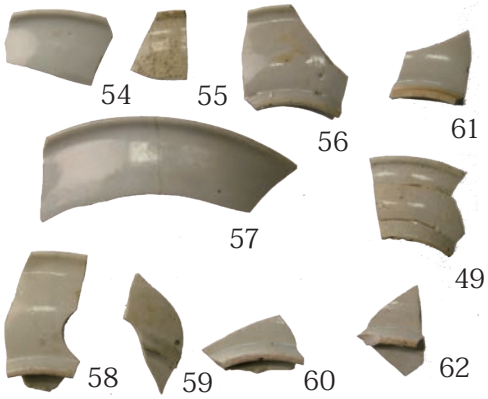
笄

高台付青花皿

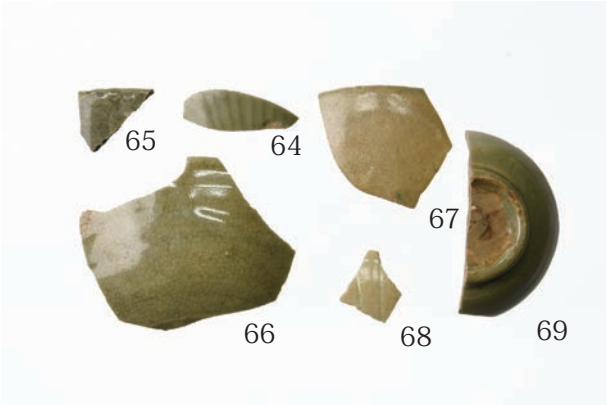
碁笥底青花碗



白磁1



白磁2



青磁外面

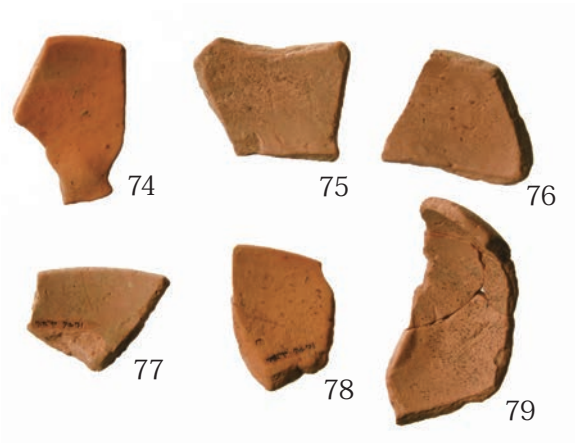
青磁内面

図版4

国産陶器外面

国産陶器内面

土師器外面



土師器内面

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	つぼやじょうあと
書　　名	坪谷城跡
副　書　名	本村谷川４通常砂防工事
シ リ ー ズ 名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 251 集
編　著　者　名	和田理啓
編　集　機　関	宮崎県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　TEL 0985-36-1171
発 行 年 月 日	２０２０年　3 月 19 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
つぼやじょうあと 坪谷城跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうつぼや 東郷町坪谷	45401	J02	32° 21′ 52″ 付近	131° 27′ 7″ 付近	20181009 ～ 20190208	1000 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坪谷城跡	城館跡	中世 近世	堀切状遺構	土師器 国産陶器 輸入磁器（青花・白磁・青磁） 刀装具（笄）	

要　　約	今回の調査では城郭主要部分は対象地外であったが、城郭機能時のものと考えられる輸入陶磁器類がまとまって出土した。伊東四十八塁のひとつに数えられる坪谷城であるが、その記録は非常に少ないこともあり、貴重な成果が得られたといえる。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 251 集

坪谷城跡

本村谷川４通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020 年３月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171　FAX 0985(72)0660

印　刷　株式会社ながと
〒 882-0856　宮崎県延岡市出北 4 丁目 2479 番地
TEL 0982(33)4001　FAX 0982(21)5963